

連載講座

第21回

茶と用水井戸・柳沢吉保

作家 童門冬二

徳川家康は大坂の陣で豊臣氏をほろぼした後、いろいろな法律を出した。かれはずいぶん前から平和主義者だったので、豊臣氏をほろぼした後は日本国を平和に経営しよう、と考えた。その平和を維持するための法令を次々と出した。その中に「一国一城令」というのがある。つまり「ひとつの国には城をひとつしか建ててはいけない」というものだ。ところが特例があった。しかもその特例は、家康が江戸城を構える武蔵国（東京都・埼玉県・神奈川県の一部）で適用された。武蔵国にはすでに江戸城がある。ということはこれだけで「一国一城令」を守ることになる。ところが現在の埼玉県には、川越城・忍（行田）城・岩槻城の三城があった。しかも、この三城には徳川幕府の政策立案グループとっていいような、頭脳明晰な老中（閣僚）がそれぞれ城主として配属された。とくに三代将軍家光の時代には、松平信綱・堀田正盛・阿部忠秋などの超エリートが、それぞれこれらの城を交替で城主になっていた。そして家光自身も、よく馬に乗って話に力が入ると川越城あたりまで往復することが多かったという。つまり家光たちの感覚は、国という単位で地域を考えるから、武蔵国の中には前に書いたような現在の都県が含まれるから、いまのように県別に境界を意識することなどなかったのである。関東地方には強い風が吹く。そして、火災が起こる。その火災も単に建物の密集地域だけではなく、原野にも起

こる。野火だ。そのために川越城主になったとき松平信綱は有名な「野火止用水」をつくる。その名のとおり「野火を防止する用水」のことだ。かれの前任者である堀田正盛が城主のときに、川越には大火が起こった。そのため家光は信頼する寵臣ではあったが、やはり責任をとらせて川越城から去らせた。後に入ったのが松平信綱である。信綱は川越の復興計画を立て、これを実施した。現在川越の町が、白い蔵と新しい建物とが混在して、多くの観光客を集めているのも信綱の復興計画がそのまま根づいているからだ。そしてこの川越城に元禄年間に入城したのが柳沢吉保だ。五代将軍徳川綱吉の寵臣である。綱吉は、老中たちによる合議制よりもむしろ自分の独創を実現するために、側用人制度をとった。吉保は側用人になった。川越城に入ると、この城は現在も残っているが居館風の建物で、一般の城とは違う。大地にベタッと張りついている。そのためにこの地方で吹く風に乗って、大量の土埃が吹きつける。吉保は閉口した。そこであるとき部下に向かって、

「この土埃は畑からとんでくる。畑を細かく区分し、周囲に埃止めを設けよ」

と命じた。部下は「埃止めにはなにを使ったらよろしゅうございましょうか？」

ときく。吉保はちょっと思索し、

「茶の木を植えろ」と命じた。吉保自身、風流人であり茶をみずから点て、そして日本の古い文学

や、歌などをたしなんでいたためだ。部下は早速近郷の農民たちに命じ、耕した畑に茶の木を植えさせた。これが機能して、川越城に吹きつける土埃がかなり防がれた。のちに、

「これが狭山茶の起源だ」という人もいる。

領内に三富(上富・中富・下富)といわれる高地がある。松平信綱の野火止用水は、彼が部下に命じて開削した「玉川用水」の一部を分流させてつくったものだが、このときに三富地域には水がまわらなかった。地面が高すぎてとても送水できなかったからである。三富地区は依然として水不足に苦しんだ。単に農業用の灌漑用水だけではない。火災が起こったときにも防火できない。したがって、

「なんとかしてください」

という嘆願は、信綱の時代から起こっていたのである。柳沢吉保はこれを課題にした。そして、部下の曾根権太夫に命じて、

「三富地区の希望をかなえてやれ」と命じた。曾根は都市計画にも知識と技術を持っていた。吉保から命ぜられたことを真剣に考えた。かれが立てたのは、

- ・いきなり給水計画はこの地域には無理だ
- ・その前に、地域に住民の居住計画を立てる

・そのためには、整地と道路計画が必要だ

・整地した土地には他地域から移住者を招く

と土地整理計画を立てたのである。これがトントン拍子で進み、移住者もかなりの人数がやってきた。このときはじめて曾根は移住してきた住民に対し、

「各戸ごとに深井戸を掘れ」と命じた。住民たちはこの指示に従い、こもごも努力して深井戸を掘った。地の底によい水脈があったので、井戸は次々とよい水を湧かせた。そして住民がこれを汲まないときは、湧き水はそのまま井戸の中に溜まり水となった。曾根は、

「この井戸に溜まった水が、火災など起こったときに必ず役に立つ」と考えていたのである。

このように、主として埼玉県の上野城の城主だった老中は、いつも雲の上で政策を考えていたわけではない。かれら自身が、地に密着した生活関連のできごとに、それぞれ頭を悩まし、チエを絞り出した的確な対応策をとっていたのである。すべての殿様が、水戸黄門にぶっとばされるような悪事ばかりやっていたわけではない。あくまでも「愛民」の思想を持っていた。とくに木と紙でできた家がすぐ焼かれてしまう火災には、相当敏感な感覚を持って緊張していたのである。